

1996 発掘
てら かた い せき
寺 方 遺 跡

山の上には、古墳やお城があるというけれど、
山の東のすそでは何が見つかったのだろう……



小川台5号墳に立てられていた埴輪

い つ

1996年2月2日から同年2月14まで

ど こ で

千葉県匝瑳郡光町（市長村コード12-381）小川台溝戸ほかにある

寺方遺跡（遺跡番号コード38、北緯35°41'12"、東経140°30'04"）において

だ れ が

千葉県教育委員会、光町教育委員会の指導のもとに財団法人 東総文化財センターが

何のために

町道0103号線の道路改良工事のため無くなってしまう遺跡の記録を残すことを第一の目的に

何をした

130m²について発掘調査をしました

この本はその発掘調査の成果をまとめたものです。

なお、現地での発掘作業および室内での整理作業、報告書の作成は、調査研究員 實川理が担当しました。

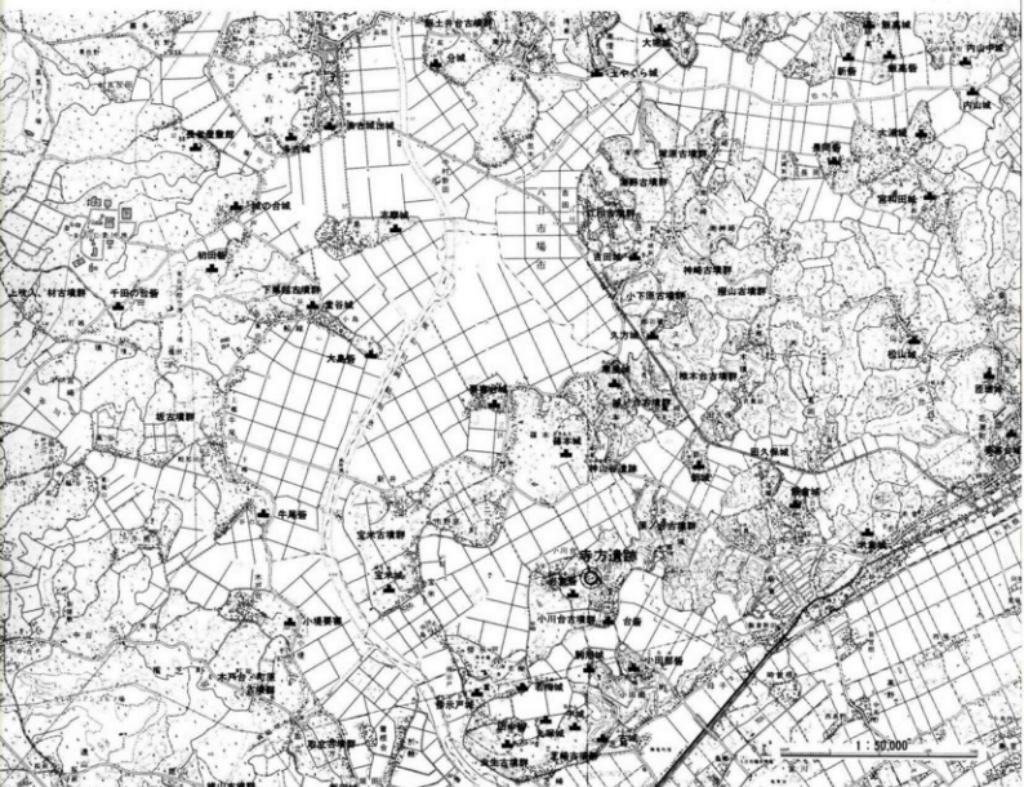


図1 遺跡の位置および周辺の古墳群と中世の城跡

調査の概要

調査は、試掘により調査区を限定しておこなった。便宜的に北側調査区、南側調査区と呼ぶ。



見つかった遺構 北側調査区では、溝が1条見つかった。溝の掘り方や、溝の中から見つかった土器から、西側の台地上に築かれている岩室砦（いわむろとりで）に関係する空堀と考えられる。他には近現代の擾乱と、それに伴う遺物がわずかに見つかっている。一方、南側調査区では、竪穴住居（古墳時代終末期）が3軒、掘立柱建物の柱穴が1基、土坑が1基見つかっている。土坑は、底面付近のみの遺存であり、出土遺物もないと認め、性格等は不明である。



寺方遺跡の時代 今回の調査では、竪穴住居などのはっきりとした遺構の見つかった古墳時代や中世の他に、古くは縄文時代前期の終わり頃の土器のかけらや、また、平安時代（9世紀代）の土器のかけらも見つかっている。

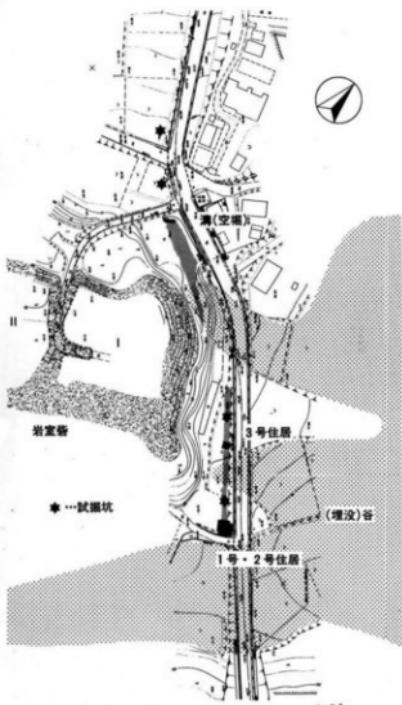


図2 調査した範囲と見つかった遺構



縄文土器は1片ではあるが、縄文時代前期*の人間がこの付近で活動した、りっぱな証拠である。また、今回の調査範囲では見つかっていないが、平安時代の住居も近くに存在する可能性が高い。

* (放射性炭素による年代測定によれば今から約5000年前)

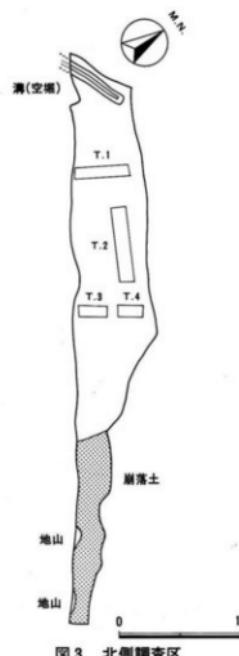


図3 北側調査区

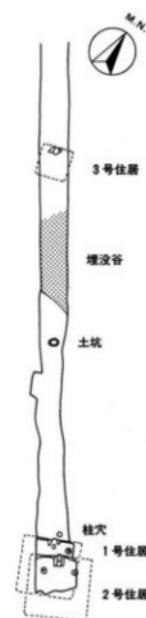


図4 南側調査区

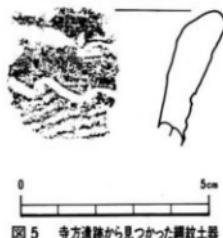


図5 寺方遺跡から見つかった縄文土器

何が見つかったのか？

その1 古墳時代(終末期)の竪穴住居(約1350年前)

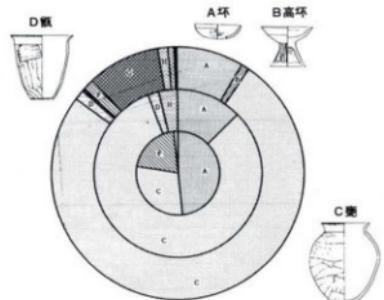


寺方遺跡1号住居・2号住居の時代は？

| | | |
|------------|--|---|
| 538 (552) | 仏教が伝わる | 小川台5号墳(光町) |
| 593 600 | 聖徳太子が推古天皇の摂政となる 第1回 道路使 | 城山1号墳(小見川町) 殿塚古墳・鶴塚古墳(芝山町) 金鈴塚古墳(木更津市) 間向古墳(八日市場市) |
| 645 | 大化の改新 中大兄皇子(天智天皇)・中臣(藤原)麻足らが蘇我入鹿・蝦夷を滅ぼす | 寺方1号・2号住居 |
| 710 | 平城京に都をうつす | |

竪穴住居からは、何が、どのくらい見つかったのか？

竪穴住居から見つかるのは、当時の人達が使っていた道具などのうち、千数百年経っても腐らずに残っていたものだけです。つまり、木の器や籠、衣類などの多くは腐って残っておらず、もっぱら掘り出されるのは土器のかけらばかりなのです。



*実測図は壺を除き『酒直遺跡発掘調査報告書』より

| | (単位名: g) | SI-1 % | SI-2 % | SI-3 % |
|---------------|----------|--------|--------|--------|
| A - 土師器 环 | 523 | 8.7 | 368 | 12.7 |
| B - 土師器 高环 | 62 | 1.0 | 0 | 0.0 |
| C - 土師器 瓢 | 4,523 | 75.5 | 2,362 | 81.6 |
| D - 土師器 瓢 | 78 | 1.3 | 60 | 2.1 |
| E - 須思器 漏類? | 19 | 0.3 | 0 | 0.0 |
| F - 須思器 瓢 | 90 | 1.5 | 0 | 0.0 |
| G - 支脚 | 558 | 9.3 | 0 | 0.0 |
| H - 烧粘土塊 | 75 | 1.3 | 105 | 3.6 |
| I - 土師器 环(平安) | 47 | 0.8 | 0 | 0.0 |
| J - 土師器 瓢(平安) | 10 | 0.2 | 0 | 0.0 |
| K - その他 | 5 | 0.1 | 0 | 0.9 |
| 合 計 | 5,987 | | 2,895 | 57.9 |

現代の住居と竪穴住居と掘立柱建物

現代の日本の住居は、玄関に入ると靴を脱いで上にあがる。つまり床は地面よりも高い。竪穴住居は、土間が地面よりも低く、穴倉に入るとといった感じのいわば半地下式住居。掘立柱建物は、床が地面と同じ平地建物か、地面よりも高い高床建物だが、規則的に方形にならんだけ穴しか見つからず、判断は難しいものが多い。

今回の調査で見つかった土器は、表面(器面)が荒れて砂質に富んだ見かけをもつものが多い。竪穴住居に埋まっていた土が、水田の土に似て掘り難くまた、帶水層に近い地層を掘り込んで竪穴住居がつくられていることから、埋没後、土中での劣化が進んだもの(阿部1995)と考えられる。

竪穴住居復元図(断面)～群馬県子持村黒井峯遺跡の場合～



「日本の古代遺跡を掘る4 黒井峯遺跡 日本のポンペイ」より一部改変

カマドの使い方(推定復元図)



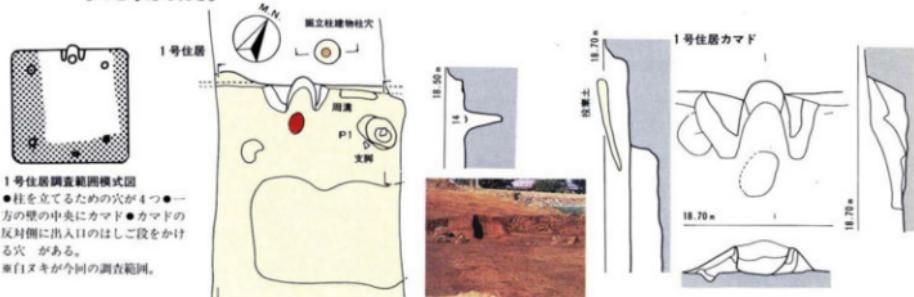
イラストは「むかしの和良比」より一部加筆



1号住居

遺物の出土状況から、この住居に住んでいた人間（居住者）が引っ越す際に、堅穴住居を解体した（今泉1989）と考えられる例である。P1の南側の土間にには、カマドから抜き取られた支柱（27）と、おそらくカマドに掛けられていたであろう甕の破片（12）があり、P1内からは甕の破片（14）が見つかっている。P1内の甕の破片の存在から、柱が立っていたとは考えられず、柱穴の土層断面の観察でも柱跡土は確認できていないことから、柱は再利用するために抜き取られているものと考えられる。

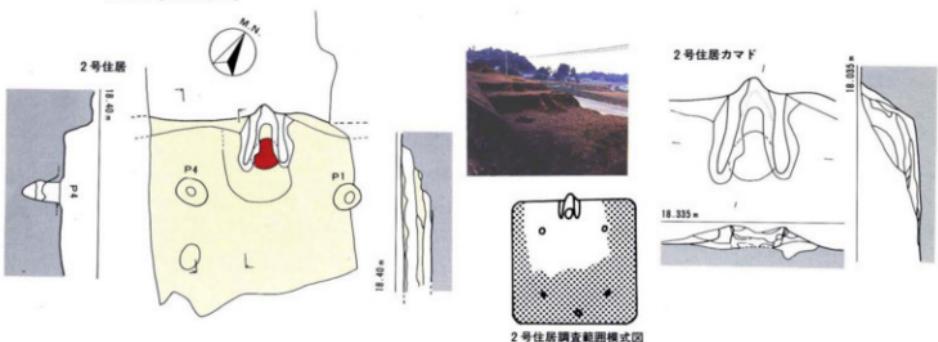
上記の遺物は、いずれもこの住居の居住者が残していくものと判断できるものである。他には、住居内で使われていたものが置き去りにされた（遺棄）と考えられるものは見当たらず、いずれも廃屋に捨てられた（廃棄）ものと考えられる。



2号住居

柱穴は2本を調査。いずれも柱痕跡土は見られず、抜き取られているものと考えられる。遺物は、遺棄と考えられるものではなく、すべて廃棄されたものであろう。今回の調査で唯一完全な形に近い土器（土師器の环28）は、1号住居の土間の下、2号住居のカマドの上から見つかったものである。これも2号住居の居住者が残していくものとは言えない。

2号住居に埋まっていた土（覆土）を観察したところ、地山の土と同じ土がほぼ水平に堆積しており、あるいは2号住居が不用となり捨てられた（廃棄された）後まもなく、1号住居をつくる際に埋め戻したこと示しているかもしれない。

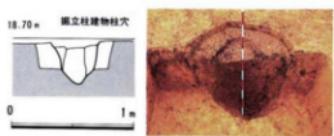


3号住居

カマドの最下部の発見により、その存在が明らかになった。住居の大きさもはっきりわからない。ただし、堅穴住居をつくったときの痕跡（掘形）の一部から、1号住居・2号住居よりも小型と考えられる。

掘立柱建物の柱穴

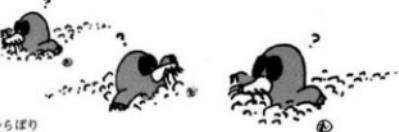
中央が柱が腐った土（柱痕跡土）、両側が柱穴に立て固定するために埋めた土。



何が見つかったのか？

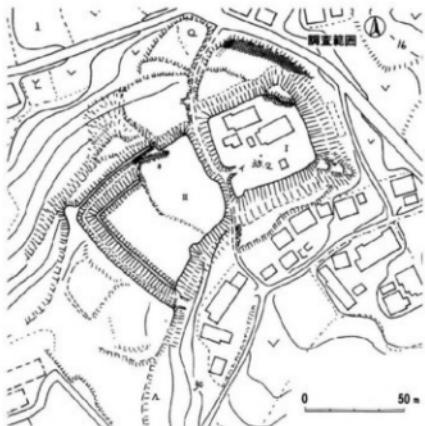


その2 中世のお城～岩室砦～の空堀



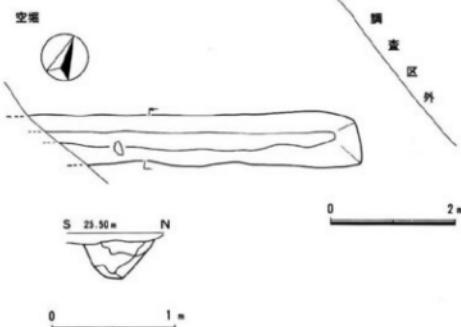
北側調査区では、岩室砦に関連する空堀が見つかった。防御のための土手である土壙の痕跡はないが、台地上に続く道が北側にあることから、南側に土壙を築いていた可能性はあるだろう。なお、空堀の南側には、近現代の土地利用痕跡（擾乱）のはかは、中世の穴（土坑）などは見つかっていない。

時期は、空堀から見つかった内耳土鍋が、古瀬戸後期の遺物と伴うものの特徴をもつ（笛生氏ご教示）ことから、15C代と考えられる。



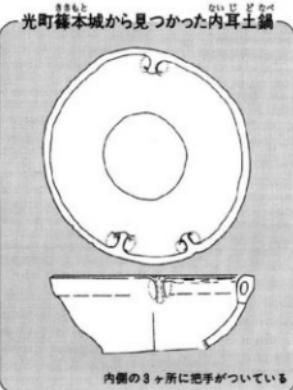
岩室砦概念図 「千葉県所在中世城館跡詳細分布図調査報告書」
—旧下総国地域—より一部加筆

今回の調査により、岩室砦が、台地上のみに展開するのではなく、そのそばにまで関連する造構が分布することが明らかとなった。これは鎌本城（城山遺跡）の調査成果とも一致し、城を考えるうえで見落とすことのできない部分であることがより確かなものとなった。



岩室砦

椎名胤光の孫の岩室資胤が岩室城を築いた、という伝承が残っているという。堀切により隔てられた2つ（？）の曲輪からなる。東の曲輪Iが主郭。曲輪IIの西側には、土壙と「L」字形の堀が良好に残る。

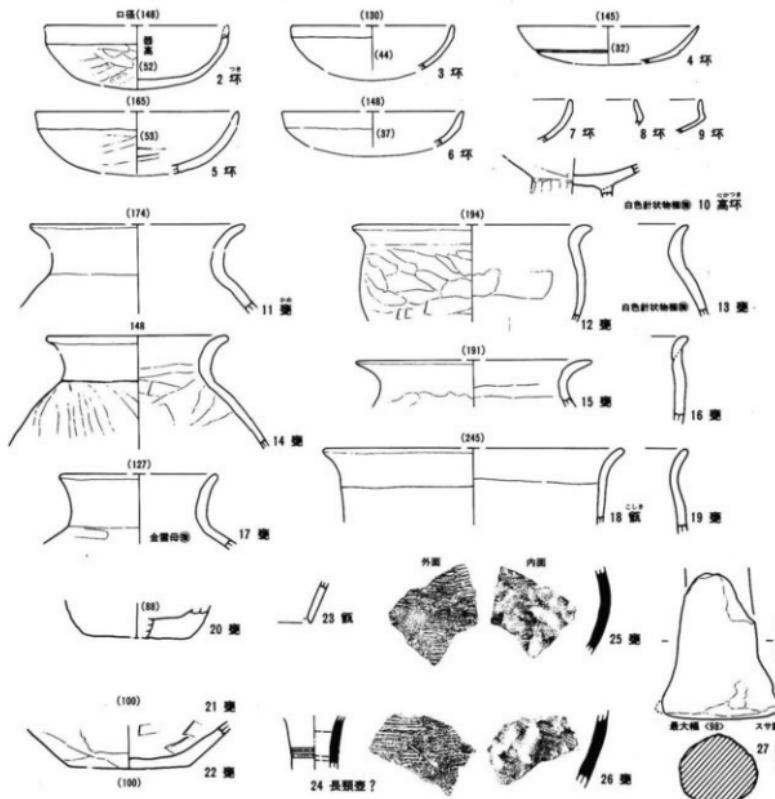


内耳土鍋の使い方(推定復元図)

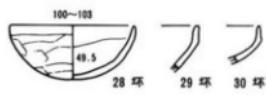
イラストは「むかしの和食」より

古墳時代（終末期）

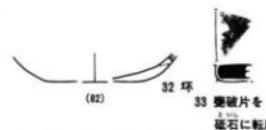
1号住居



2号住居



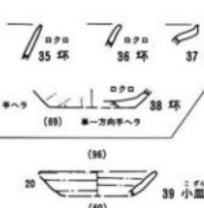
3号住居



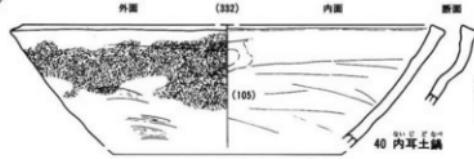
(空堀)



(1号住居)



空堀



*遺物番号以外の数値は、計測値（単位はmm）。()付は推定値、< >付は遺存値を示す。
* 2~23、28~32、34~38は土器類。24~26、33は須恵器。39~40は土器質土器。



撮影は千葉県商事による

《引用・参考文献》

- 浜名徳永はか (1975) 「下総小川台古墳群一千葉県柏崎市小川台古墳群調査報告書一」 八重教育委員会・小川台古墳群調査団
芝山はにわ博物館 (1977) 「はにわ国隊3 小川台古墳群・殿部田古墳群」
- 浜名徳永はか (1980) 「上総殿部田古墳・付宝馬古墳一千葉県武藏郡芝山町殿部田・宝馬所在古墳調査報告書一」 芝山はにわ博物館
- 福間 元はか (1986) 「酒直遺跡発掘調査報告書」 酒直遺跡発掘調査会
- 今泉 達 (1989) 「豊穴住居の解体と引取し」 史館 第21号 史館同人
- 萩 暢久 (1990) 「第4節 海泥地区」 千葉県所在古墳詳細分布調査報告書一 千葉県教育委員会
- 宮内勝巳 (1991) 「第1節 出土土器」 千葉県印旛郡栄町竜角寺尾・酒直遺跡・竜角寺谷田川遺跡 諸印旛郡市文化財センター 72-83頁
- 白井久美子・栗田則久・土野純司、萩原泰一 (1992) 「房総考古学ライブラリー6 古墳時代2」 諸千葉県文化財センター
- 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館常設展示図録 (1995) 「『は(ふさ)』のくにの古墳と埴輪」 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
- 阿部芳郎 (1995) 「土器焼きの火・料理の火—繩文土器にみられる使用痕跡と器体の劣化構造ー」 「考古学研究」 第42巻 第3号
- 津田芳男 (1989) 「所謂内耳土器について」 「茂原市文化財センター年報No.3 一昭和62年度」 茂原市文化財センター
- 浅野晴樹 (1991) 「『西』における中世在地系土器について—主に開闢を中心にして—」 「国立歴史民俗博物館研究報告」 第31集 国立歴史民俗博物館
- 萩生 衡 (1991) 「房総の中世土器様相について」 史館 第23号 史館同人
- 瑞田浩司・土屋潤一郎・大野康男・篠生衛・井上哲郎 (1994) 「房総考古学ライブラリー8 歴史時代2」 諸千葉県文化財センター
- (1995) 「シンボルマーク よみがえる羅本城跡・一戦国動乱の城郭の謎にせまる—(羅本城に見る房総の中世)」 諸東総文化財センター
- 八巻孝夫 (1995) 「光町岩室塚」 千葉県所在中世城跡詳細分布調査報告書1 田下綱田地域一 千葉県教育委員会

《発掘調査参加者》 明石静子、飯田勝恵、飯田好江、宇井ふみ、大木美津江、岡村安、香取信子、金杉なか子、鎌形タカ、鎌形一、久古千恵、佐藤輝江、高根たか、寺本はな、戸村ハツ、長谷川ヒデ子、林かね、林せつ子、林なか、林むづ子、平山利子、山口富枝、椎名文雄

《整理作業参加者》 飯田幸江、印東明美、佐久間孝子、佐藤政代、高橋淳子

《ご教示いただいた方々》 萩暢久、篠生衛、福間元、宮内泰巳

《ご協力いただいた方々》 村越賛司、村越すゑ、平和建設興業㈱および柏高木土木の工事関係のみなさま

以上、ここに記して感謝いたします。

小川台古墳群

栗山川から東側が、下海上(しもつうなかみ)と呼ばれていたころに、小川台を中心とする地域を支配していた人たちのお墓。確認されているだけでも、前方後円墳5基、円墳13基、方墳1基の計19基からなる。1号墳が5C後半につくられた後、6C後半以降につづくられているようである。これらのうち5基が1974年(S49)年、農業構造改善事業の際に調査されている。



1996(平成8)年3月20日 印刷
1996(平成8)年3月25日 発行
編集 (財)東京文化財センター
発行 光町
印刷 株式会社エリート印刷